

スポーツとリスクに関する文化論的研究

尾川翔大 (スポーツ危機管理研究所)

野井真吾 (教育福祉系)

はじめに

ピーター・ドネリーが述べるように、「スポーツとリスクについて最初に注意することは、スポーツにおいてリスクを取るためのあらゆる種類の方法があるということである。ケガのリスクはおそらく最も一般的であり、おそらくより長期的な病気のリスクに関連¹⁾している。それゆえ、これまでのリスクとスポーツに関する研究の多くは、スポーツの現場に関わるケガや事故を取り上げてきた。そうした議論は、スポーツの現場に関わるケガや事故の減少を目指すという実践的な関心と分かちがたく結びついている。そして、あらゆるリスクを、科学的根拠に基づいて可視化することに努めていき、そこから、スポーツのリスクマネジメントが重要視されるようになっていく。無論、スポーツの現場から立ち上がる問題意識に基づいたスポーツのリスクマネジメントに関する研究が中心的に蓄積されている²⁾。

一方、リスクとスポーツに関する研究は、ケガや事故とは別の位相の現象を問題化していく可能性をもっている。スポーツをめぐる政治経済的状况は、人びとの生活をめぐるリスクとも結びついている。これは、本プロジェクトのテーマの1つに据えられている。これと同時に、本プロジェクトの最も大きなテーマは、リスクとスポーツに関する研究を人文・社会科学の領域で体系化を図っていくことである。もっとも、以上のテーマは、これから開拓していくものであり、本報告は、その一里塚である。ここでは、既存の研究の枠組みを抜け出ることを見据えて、次年度以降の展望を示すにとどめたい。

今後のリスクとスポーツの研究の方向性について

亀山佳明は、『21世紀のスポーツ社会学』という題目をもつ書の「はじめに」において、「リスク社会におけるスポーツとは」という副題をつけた。それは、ベッ

ク、アンソニー・ギデンズ、スコット・ラッシュによって提起された「再帰的近代化」³⁾という見方に基づいてスポーツ研究の見直しを提案するものであった⁴⁾。ここで亀山は、ウルリッヒ・ベックの「リスク社会」論にも触れている。そこではリスクがキーワードの一つになっている。現代社会においてリスクがキーワードの一つであるとすれば、現代社会と不可分な関係にある現代スポーツにおいてもリスクはキーワードになってくるはずである。そこで、本年度は、リスクとスポーツに関する研究を検討することにした。

リスクとスポーツを主題として、それを研究していくための社会学的理論と研究アジェンダを分析したのはリチャード・ジュリアノッティである。ジュリアノッティは、2009年に「リスクとスポーツ：社会学的理論と研究アジェンダの分析」⁵⁾と題して「スポーツの社会学者に簡潔な導き手を提供」することを試みる。ここでジュリアノッティは、リスクとスポーツの社会学的研究を進めるために4つのカテゴリーを提示する。ただし、これらは相互に排他的なものではなく、相互に関連性を持つ可能性があることも付け加えている。第一はリスクとカリキュレーション、第二は快楽主義、主意主義そして超越のリスク、第三はリスクカルチャーとサブカルチャー、第四はリスクと近代化である。この論考からリスクを主題とするスポーツの社会学の主要な論点を学ぶことができる。これまで、リスクを主題とするスポーツ研究の多くはケガを扱ってきた。ケガのリスクはスポーツ実践と分かちがたく結びついているからである。ただ、このジュリアノッティの論考が教えてくれるように、リスクを主題とするスポーツ研究の対象はケガのみではない。さらに、また、ジュリアノッティは、あくまで、社会学的なパースペクティブで4つの理論的枠組みを提示したのだが、しかし、リスクとスポーツ研究は社会学の隣接領域でも論じることが示唆されている。おそらく、第一のリスクとカリキュレーションは心理学、第二の快楽主義、主意主義そして超越に関するリスクは哲学、第三のリスクカルチャーとリスクサブカル

チャーは文化・社会人類学と結びつくものであり、無論、第四のリスクと近代化は社会的な問いである。したがって、このジュリアノッティの論考は、ここで挙げた4つのカテゴリーにおけるリスクとスポーツに関する研究を拡張する可能性を秘めている。今後は、このジュリアノッティの論考を出発点にして、リスクとスポーツの研究を押し広げていきたい⁶⁾。

究学会編『リスク学事典』丸善出版、2019年、i)。したがって、リスクは、分野横断的に追及されてよいものである。いわゆるスタディーズ系の分野といえるものであろう。

註・引用および参考文献

- 1) Peter. Donnelly. Sport and Risk Culture. In : Kevin Young (ed.) . Sporting Bodies, Damaged Selves: Sociological Studies of Sports-Related Injury. Oxford: Elsevier. 2004. p. 29.
- 2) 美馬達哉が述べるように「可視化しやすいものだけをマニュアル化するリスクマネジメントの構造のなかでは、可視化されにくいリスクや扱いにくいリスクや計算の困難なリスクは、存在しないものとして扱われがち」である（美馬達哉『リスク化される身体—現代医学と統治のテクノロジー』青土社、2012年、p.27）。また、東賢太朗は「ますます複雑化する社会システムの中で生きている限りにおいて、個々人がリスクを適切に認識し、引き受け、それらすべてに対処することは、困難である」と述べている（東賢太朗「「リスク社会」へのオルタナティブ—イントロダクション」東賢太朗ほか編『リスクの人類学—不確実な世界を生きる』世界思想社、2014年、pp.231-232）。
- 3) ウルリッヒ・ベック、アンソニー・ギデンズ、スコット・ラッシュ、松尾精文、小幡正敏、叶堂隆三訳『再帰的近代化—近現代における政治、伝統、美的原理—』而立書房、1997年。
- 4) 亀山佳明「はじめに—リスク社会におけるスポーツとは—」日本スポーツ社会学会編『21世紀のスポーツ社会学』創文企画、2013年、pp.1-4。
- 5) Richard, Giulianotti. Risk and Sport: An Analysis of Sociological Theories and Research Agendas. Sociology of sport Journal. 2009. 26(4): 541-556.
- 6) 2019年に日本リスク研究学会の編集によって『リスク学事典』が刊行された。リスクに対する現代社会の関心の高まりをうかがい知ることができる。ここでリスク学は「自然科学、社会科学、自然科学など多様な分野におけるリスクに対するアプローチの集合体」とされている（日本リスク研